

英語科学習指導案

指導者

日時 平成25年11月30日(土) 第2校時(11:05~11:55)
年組 中学校第1学年1組
場所 中学校第1学年1組教室
単元 道案内 ~状況に応じて表現を使ってみよう~

(Speaking Plus2 道案内 *NEW HORIZON English Course 1* 東京書籍)

単元について

本単元では、登場人物の一郎が在住する町で、外国人の女性に英語で道を尋ねられ、英語で道案内をする内容となっている。道案内という言葉の使用場面を通して、**Pardon me?**などの聞き返す表現、案内内容を説明する際に用いる命令文や助動詞 **can** を学ぶことができる単元となっている。道案内については、小学校英語活動で用いられる『**Hi, friends! 2**』で **Turn left/right.** や **Go straight.** など命令文が取り上げられている。このような英文は一般的に命令文と呼ばれてはいるものの、命令する場面のみで命令文が使われているわけではない。松原・中村(2008)は、命令文日英語比較の中で、「英語においては道案内の指示が命令文でなされているのに対して、日本語ではそれが命令文ではなく依頼文にすり替わっている」としている。このことを知ることで、命令文が命令したり指示したりする場面だけでなく、様々な場面で使用できることをとらえることができる。また、助動詞の **can, may, will, could, would** など道案内で用いられる。その中でも **can** は小学校英語活動だけでなく中学1年段階でも取り上げられる助動詞である。**can** については主に「能力」の意味を学習する。しかし、**can** は「能力」だけでなく、**Can I..?**のように「許可」を表すこともできる。「許可」を表す助動詞には **may** も存在する。大竹(2000)は、**can** と **may** の違いについて、話し手が **can** を用いた場合、話し手と聞き手を対等なものとして扱っている、そして話し手が **may** を用いた場合、話し手を聞き手よりも目上の者として扱っているとしている。つまり道案内において、**can** を用いることで道を尋ねる者が尋ねられる者との立場をとらえることができる。以上のように、道案内の指導を通して、道案内特有の表現等を学ぶだけでなく、使用される言語の働きについて理解を深めることができる単元であるといえる。

本学級の生徒は、明るく元気なクラスである。全員が小学校で英語活動を経験しており、4月に行ったアンケートでは7割の生徒が「英語が好きである」と回答している。英語が好きな理由には、「外国人とコミュニケーションをとれることが楽しい」という意見が半数近くであり、英語をコミュニケーションのツールとして身につけていきたいと感じている生徒が多い。反面、「ゲームなどができて面白い」「自由な教科だったから」という生徒も4割近くいる。こうした生徒は、授業で状況を深く読み取る授業や新出文法や表現の使用場面を考える授業を苦手と感じている様子が見受けられる。文法面においては、命令文、助動詞 **can** は既習事項である。命令文については、道案内で使われる **Turn left/right.** や **Go straight.** などの命令文は小学校英語活動で、動詞を文頭に置いて文を始めること、否定については **Don't** を文頭に持ってくること、提案するときには **Let's** を用いることなどの体系的な知識については中学校で学んでいる。次に助動詞 **can** については、小学校英語活動では、**I can swim.** のような「能力」を表すものを学習している。また、中学校では、**can** の意味・形・用法といった体系的な知識について学習している。

以上のことを踏まえて、指導にあたっては、次のことを留意する。まず、比較的平易な英語で道案内ができることに注目させ、コミュニケーションが簡単に成立することを意識づけることで、意欲を高めるよう工夫する。その上で、既習事項である命令文と助動詞 **can** について触れていく。命令文については、道案内で使用されることが多い表現を中心に取り上げていく。その際、日本語と英語の意味の違いに着目さ

せ、日本語においては、依頼している意味が道案内の状況に合うことをとらえさせ、命令文を使用する場面が命令する場面だけではないことを指導する。また、can については、May I...? と Can I...? を取り上げて、2人の人間関係に注目させて、その意味の違いについて考える場面を設定する。考える場面においては、対話文の比較や注目すべき表現などを考える手立てとして取り上げることで、表現の使用場面を考えることを苦手を感じる生徒へ支援していきたい。以上のような工夫を取り入れながら、言語の働きについて理解を深められるように指導する。そして、状況に応じて言語を取捨選択しながらコミュニケーションできる場面を設定していく。その際、ペアワーク等の対話形式のパターンプラクティスや活動を取り入れ、コミュニケーションであることを意識づけていく。そして、最終的にALTと道案内をする機会を設定し、その様子から道案内の表現や命令文、助動詞canの理解と使用の妥当性を測る。

指導目標

1. 間違いを恐れずに英語で話すようにさせる。
2. 命令文や助動詞canを用いて、英語で道案内ができるようにする。
3. 命令文や助動詞canの機能を理解できるようにする。

指導計画

1. 道案内の場面①の読み取り、命令文の意味の理解 1時間
2. 道案内の場面②の読み取り、助動詞canの機能の理解 1時間 (本時)
3. 道案内の練習 1時間
4. ALTに道案内をする 1時間

本時の目標

助動詞mayとの比較を通して、助動詞canの機能を理解することができる。

「学びのつながり」の視点

Warm-upでは、フォニックスを取り扱う。Ⅱ期後期の後半においては、例外を含むフォニックスを音読筆写させながら文字と音のつながりについて理解できるようにする。命令文の指導においては、既習の表現を確認することで、形や用法をおさえる。その上で、日本語との比較を取り入れ、命令だけでなく依頼の意味としてとらえることができるようにする。そうすることで、命令文の使用場面が必ずしも命令する場面だけではないことを気づかせる。助動詞canにおいては、「能力」の意味とcanの用法について復習することで、なぜcanを小学校の時にそのように使用していたのかについて理解できるようにする。そして、本単元で取り上げるcanの意味が「能力」だけではないことに気づかせながら、canの幅広い機能について理解を深めるように指導する。以上のような指導を通して、言語の使用場面に応じて様々な捉え方や使い方ができることを理解できるようにし、命令文やcanを適切に使用できる力を高めていく。このことがⅡ期における「足場づくり」と考える。

学習の展開

学習活動と内容	指導上の留意点 (◆評価)
<p>1. Warm-up (10分)</p> <p><input type="checkbox"/> phonics の音読筆写練習をする。</p> <p>2. Review (10分)</p> <p><input type="checkbox"/> 前時に取り扱った英文を音読する。</p> <p><input type="checkbox"/> 前時の学習内容を確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・命令文の依頼の意味について ・道案内特有の表現について ・May I について <p><input type="checkbox"/> 再度英文を音読する。</p> <p>3. Introduction (5分)</p> <p><input type="checkbox"/> 英文を読んで、質問に答える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Aは何のために対話をしていますか。 <p><input type="checkbox"/> 新出語句の確認</p> <p>3. Comprehension (20分)</p> <p><input type="checkbox"/> 英文を読み、質問に日本語で答える。</p> <p><input type="checkbox"/> 英文を音読練習する。</p>	<p>○音読筆写の際に、音と文字が一致しているかどうか机間巡視し、必要に応じて指導する。</p> <p>○正しく音声を捉えられていない場合は、その部分を取り上げて音読指導する。</p> <p>○命令文、道案内特有の表現について確認することで、生徒の理解度をとらえ、必要に応じてそれらについて確認する場面を増やす。</p> <p>○May I の意味を確認することで、本時に取り上げる Can I との意味の比較できるようにしておく。</p> <p>○語句のつながり等に気をつけながら音読ができているのかを机間巡視で確認し、必要があれば発音指導をする。</p> <p>○英文を音読させることで、新出語句に注目できるようにする。</p> <p>○内容に関する質問を与えることで、音読の際に内容を大まかにとらえることができるようにする。</p> <p>○アクティブボードを利用して、フラッシュ的に繰り返し、できるだけ多く発音させることで発音と意味をしっかりと把握できるようにする。</p> <p>○英文に対する質問と答えを活用して視覚的に助動詞 can の意味が確認できるようにする。</p> <p>○chorus reading, buzz reading, pair reading などを活用し変化をつけながら、繰り返し音読ができるようにする。</p> <p>○語句のつながり等に気をつけながら音読ができているのかを机間巡視で確認し、必要があれば発音指導をする。</p>

<p>□助動詞 can について考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「can はどんな意味で使われているだろう。」 〈予想される反応〉 ・話すことができますか。 ・話せますか。 ・話してもいいですか。 ・「対話している2人はどんな人間関係だろう。」 〈予想される反応〉 ・見知らぬ人同士 ・道を聞いている人がぶっきらぼう ・道を聞いている人が please などを使っていないから、えらそう ・「Can I にはどんなニュアンスがあるのだろう。」 〈予想される反応〉 ・相手を軽視している ・相手のことを考えていない ・相手と対等かそれ以上 <p>4. Consolidation (5分)</p> <p>□can について分かったことを書く。</p>	<p>○can が「能力」の「できる」だけではなく「許可」の意味があることに気づかせるように場面の再現をするなどの工夫をし、状況から意味をとらえることができるようにする。</p> <p>○人間関係に焦点を当てることで、対話で使用されている英語表現に着目できるようにする。</p> <p>○命令文において、please を使っていないことなどに気づくことができるように、必要があれば前時の道案内との比較をする。</p> <p>○人間関係から、May ではなく Can を使っていることに注目させるようにする。</p> <p>○例文を書かせるように指示し、その英文が「能力」と「許可」を表現しているかどうかを見る。</p> <p>◆can の機能を捉えて、例文を書くことができる。</p> <p>【言語・文化に関する知識・理解】</p>
--	--

参考文献

- 長谷川瑞穂 『東洋学園大学紀要』 8, 67-78, 2000.
- 松原健二, 中村純子 『地域総合研究』 8, 29-42, 2008.
- 大竹政美 『北海道大学大学院教育学研究科紀要』 82, 73-78, 2000.